

夜明けまえ 知られざる 日本写真開拓史 四国・九州・沖縄編

Dawn of Japanese Photography,
[Shikoku district, Kyushu district & Okinawa prefecture]

主催 東京都 東京都写真美術館／
読売新聞東京本社／美術館連絡協議会
会期 平成 23 年 3 月 8 日（火）～5 月 8 日（日）
協賛 ライオン／清水建設／大日本印刷
協力 日本大学芸術学部／長崎大学附属図書館



上野彦馬 題不詳（上野八重子像）明治 35（1902）年
長崎歴史文化博物館蔵 上野彦馬の孫娘のポートレート

■■■展覧会概要■■■

東京都写真美術館では、日本全国の美術館、博物館、資料館等の公共機関が所蔵する幕末～明治期の写真・資料を調査し、体系化する初めての試み「知られざる日本写真開拓史」の第 3 回として「四国・九州・沖縄編」を開催します。

幕末の開国と時を同じくして、日本にもたらされた写真。その技術が芸術作品に用いられる以前、つまり、写真芸術の「夜明けまえ」ともいうべき写真は、いったいどのようなものだったのでしょうか。

江戸時代の日本にとって写真は、西洋技術の象徴でした。日本最古の写真は、ペリー艦隊の従軍写真師が撮影したものです。やがて横浜や長崎などが開港し、訪日する外国人写真師との関わりから、江戸の鵜飼玉川（うかいぎょくせん）や開港地の上野彦馬（うえのひこま）・下岡蓮杖（しもおかれんじょう）など、日本人の写真師が各地に現れます。そして、西洋的近代化へ向かう日本に、写真技術は広く普及・伝承されていきました。

「関東編」「中部・近畿・中国地方編」に引き続き、シリーズ第 3 回となるこの「四国・九州・沖縄編」では、四国・九州・沖縄の美術館・博物館・資料館など、公開機関を持つ約 2,200 の施設へ収蔵調査を行い、所蔵が明らかになった多くの未公開を含む貴重なオリジナル写真作品・資料と、東京都写真美術館コレクションおよび本展の協力機関である日本大学芸術学部のコレクションをご紹介します。

これらの未公開作品は、幕末～明治時代中期という写真史の新たなページをひも解くと同時に、そこに描写された 19 世紀の日本および日本人の姿は、絵画とは異なる写真ならではの直接的な現実感をもって目の前で躍動します。本展は貴重な写真に触れる希少な機会となるとともに、表現という概念が存在しなかった時代の写真にも作品性が宿っていることを体感できる場となるでしょう。

■■展示構成と見どころ■■

写真術は、1839年8月19日にフランスで発表されました。光り輝く銀の板に画像を焼き付ける、ダゲレオタイプという方式です。写実的な絵画の歴史を持ち、カメラ・オブスクラを発明した西欧社会では、19世紀初頭から写真を発明しようと様々な努力がなされます。対して、日本の絵画は色面と主線を大切にする浮世絵に代表されるように、平面の構造を重視して再現する方法が長い歴史の中で築かれてきました。このような日本人にとって、見えるものを光学的に画面へ定着する「写真」は想像を超える文明でした。

では、西洋で発明された写真は、どのようにして日本と出会ったのでしょうか。それは日本の開国が鍵になります。プロフェッショナル・フォトグラファーの来日、日本初の写真館誕生もこの時期です。また、勝海舟をはじめとする咸臨丸の一行が随行した遣米使節を筆頭に、幕府の使節団が渡米・渡欧して多くの写真に写るのも開国に関わってのことでした。

展示は「であい」・「まなび」・「ひろがり」の3章で構成されます。

であい

第1章



フェリーチェ・ベアト 題不詳（グラバー庭園のグラバーたち）1864（元治元）年頃 長崎大学附属図書館蔵
グラバー庭園が大砲やライフルで鎧われている

第1章では、**東京初公開となる長崎大学図書館所蔵のボードイン・コレクション**を中心に紹介します。これは長崎養生所（長崎大学医学部の前身）の第2代教頭であるオランダ人、アントニウス・ボードイン（1820-1885）が、弟アルベルト・ボードインと協力し、在日期间中（1862-1866、1867、1869-1870）に撮影および収集した大小4冊のアルバムです。**フェリーチェ・ベアト**による長崎のパノラマやグラバー邸、袴袴の侍に変装したボードインらのポートレートや、チャールズ・ワーグマンの描いた漫画をベアトが撮影した写真もあります。オリジナルアルバムの展示のほか、すべてのページをプロジェクションによって紹介します。



撮影者不詳 題不詳（崎原當貴像）
明治7（1874）年頃
南嶋民族資料館蔵（石垣市）

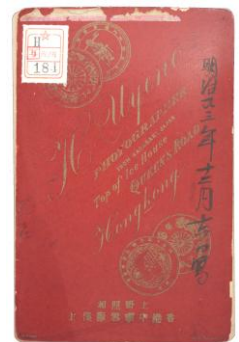
まなび

第2章

日本は、1854（嘉永 7）年の日米和親条約の締結を皮切りに、西欧諸国と次々に条約を締結し国交を広げていきます。1859（安政 6）年には、横浜、神戸、函館などの港に外国人居留地を設け、正式に世界へ門戸を開きました。これを機に、写真技術は日本の開港地へもたらされ、普及していきました。開港以前には島津家を筆頭に、洋学研究の一環として実験が進められ

ており、日本人による現存する最古の写真は 1857（安政 4）年に撮影された《島津斉彬像》です。1861（文久元）年までには鶴飼玉川（1807-1887）が、日本人初の営業写真館を江戸の薬研堀で開設します。

長崎の**上野彦馬**は堀江鉄次郎と写真の研究を進め、開国直後に日本を訪れたジョセフ・ピエール・ロシエ（1829-1872）によって技術を完成させた写真開祖といわれる人物です。このように大名による洋学研究とプロフェッショナルを目指した初期写真師たちの双方によって、写真技術は習得されるのです。本章では、東京初公開となる上野彦馬の写真作品を数多く出品し、その台紙裏デザインの変遷もご覧いただける立体展示を行います。



上) 伝・堀江鉄次郎 題不詳（上野彦馬像）文久元（1861）年頃 日本大学藝術学部蔵
下左）上野彦馬撮影局台紙 明治 20～22 年頃
下右）上野彦馬（撮影）香港支店台紙明治 23 年頃 両方とも長崎歴史文化博物館蔵

また、**内田九一**による景観写真も見所です。当館が収蔵する**西国巡幸写真**のほか、**名刺判サイズの名所写真**を展示します。近代化する日本の姿に和装の人物を配した九一独特の構図からは、幕末に生きた初期写真師の苦悩と気概が伺えます。写真の技術は、幕末期に新しさと商業的成功を求めて第一世代の写真師たちに体得されました。彼らの努力が次世代のあこがれを生み、日本中へ広がっていく核となったのです。



上右) 井上俊三 題不詳（こうもり傘を持つ女性像）上左）蓋裏に押された井上俊三のスタンプ 明治初年 高知県立歴史民俗資料館 坂本龍馬の撮影をめぐる議論で名高い井上俊三によるポートレート

左) 内田九一 長崎 諏訪 1872（明治 5）年 長崎・稲佐の恵比寿神社を写したもののだが、写真には「長崎 諏訪」と明記されている

ひろがり

第3章

幕末期の日本人が求めた初めの写真は肖像だったといっているでしょう。これによって、明治初年以降になると「写真＝肖像を簡単に作ることができるもの」という認識が広がっていきます。また、鉾山や官製工場の記録、これまで浮世絵が担っていた役者の肖像や名所絵にも写真が使われるようになります。

第二世代以降の写真師たちは、日本人の師匠を持ち、日本人の書いた文献から知識を得ることが可能になっていきます。写真術を習得するための門戸が広がったため同業者が増大し、それぞれが生き残りをかけてしのぎを削る競争時代へと突入しました。



撮影者不詳 題不詳（中村芝翫像）
明治時代中期
高知県立歴史民俗資料館蔵

第3章では、第二世代以降の写真師に焦点を当て、写真の普及と伝播を展覧します。多種多様な肖像写真を中心に立体展示を行い、台紙に描かれた意匠からその足跡を追います。



また、**現存の少ない納品袋**（写真を納める時に使われた写真師の名前入りの袋）や、**沖縄で見出されたキャビネサイズの鶏卵紙写真**、浮世絵に替わり登場する**役者写真**、**公的記録**として官制工場を写したアルバムなど、さまざまな角度から明治時代に花開いた日本の写真文化に迫ります。



左）撮影者不詳 沖縄美人 明治時代中期 那覇市歴史博物館蔵

右）左から 「江崎写真館」納品袋、江崎写真館 題不詳（男性像）2点、江崎写真館 題不詳（少年像）すべて明治時代中期 玉名市立歴史博物館ころびア蔵

明治初期から中期へと向かう日本の写真は、個人的なものから社会的なものへと広がっていきます。写真制作技術の普及によって、「写真はどのように使われるものなのか」、すなわち「**日本人の写真観**」が、この時期に形成されたと考えてよいでしょう。



撮影者不詳 題不詳（開業式）
明治時代中期 土佐山内家宝物資料館蔵
写真館の開業式と考えられる。レンズキャップをはずすポーズをとる写真師の姿や、首押さえ、蒸留器などの機材がみられる。

フィルムからデジタルへの移行によって写真が「手にできるカタチ」を持たなくなった現在、本展は初期写真を通して、モノとしての写真を改めて問い直します。初期写真の歴史的な重要性だけでなく、日本人が大切にしてきた、そして、忘れ去られようとしていく「**写真の存在感**」を目の当たりにできる貴重な機会です。

なお、本シリーズは引き続き、写真の伝搬と普及についての調査・研究をすすめ、「北海道・東北編」、「総集編」へと展覧会を開催し、日本中に現存する初期写真の現状を探る予定です。

■■『研究報告』出版のご案内■■

本展の開催にあわせ、『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 九州・四国・沖縄編 研究報告』を出版致します。選りすぐった出品写真図版をはじめ、学芸員による調査報告を所収しています。

価格：500 円（予価）

※当館ミュージアムショップ（03-3280-3279）にて発売します

■■関連イベント■■

○担当学芸員による展示解説

会期中第2・4金曜日午後2時より展示解説を行います。

4/29（金・祝）－5/5（木・祝）はゴールデンウィーク

特別フロアレクチャーを行います。

○古典技法ワークショップ

展覧会の出品作品に用いられている古典技法で写真を制作するワークショップです。詳細の日程や募集方法は決定次第ホームページで発表します。

予定しているワークショップ

3月 コロディオンプロセス

4月 鶏卵紙プリント

5月 カロタイプ



歌川芳員 外国写真鏡之図 万延元（1860）年
東京都写真美術館蔵

■■巡回予定■■

本展覧会は下記の日程で巡回を予定しています

長崎歴史文化博物館 平成23年6月11日（土）～7月8日（金）

熊本県伝統工芸館 平成23年9月9日（金）～10月2日（日）

※ 写真美術館ホームページ「学芸員みっちゃんブログ」<http://blog01.syabi.com/>
でも、一部の調査報告をアップしています

■■開催概要■■

展覧会名	夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 四国・九州・沖縄編 Dawn of Japanese Photography, [Shikoku district, Kyushu district & Okinawa prefecture]
会 期	2011 年3 月8 日(火)～2011 年5 月8 日 (日)
会 場	東京都写真美術館 2 階展示室 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 ホームページ www.syabi.com 電話 03 - 3280 - 0099 JR恵比寿駅東口より徒歩7 分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10 分
主 催	東京都 東京都写真美術館／読売新聞東京本社／美術館連絡協議会
協 賛	ライオン／清水建設／大日本印刷
協 力	日本大学藝術学部／長崎大学附属図書館
開館時間	10：00～18：00（木・金は20:00 まで）入館は閉館30 分前まで
休館日	月曜日 ※ただし3月21日は開館、翌22日（火）が休館。5月2日は臨時開館
観覧料	一般500（400）円／学生400（320）円／中高生・65 歳以上250（200）円 ※（ ）内は20 名以上の団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員は無料、小学生以下および障害者手帳を お持ちの方とその介護者は無料、65 歳以上の方は第3水曜日無料

■■お問い合わせ先■■

東京都写真美術館事業企画課

展覧会担当 三井 圭司

広報担当 久代 明子、前原 貴子

電話 03-3280-0034 FAX 03-3280-0033

※広報担当へのお問い合わせは、press-info@syabi.com（◎を@に変更してください）
までお願いします（スパムメール防止の表記です）

プレス用図版について

このリリースに掲載されている図版を、プレス掲載用にデータにてご用意しております。
ご希望の方は、上記広報担当までお問い合わせください。